

北アフリカのチュニジアで始まった民主化運動は忽ち近隣諸国に飛び火し「アラブの春！」と世界の注目を浴びた。しかし、4年を経た今日、いずれの国も民主化どころか更なる混乱の最中にあり、「もう秋になってしまった」と嘆く声も聞かれる。

シリア、イラクの混乱に乗じ、「イスラム国」はその支配地域を広げ、その異常さ・残虐さ故に世界の耳目を集めている。なぜこの様な過激派組織が生まれるのか？

先ず、イスラム教について、その起源・教義・布教・後継者争い・シーア派とスンニ派・イスラム法を外面的に遵守するだけでは得られない内面的な心の平安を得ようとする神秘主義・それを非とするイスラム復興（原理）主義思想・その思想実現の為にはテロをも厭わないとする過激派思想など宗教的な背景を説明。

続いて、中東諸国の近年の紛争に移り、第二次世界大戦後、西欧列強の支配下から順次独立した中東や北アフリカ諸国は、その多様性（民族、言語、宗教など）による内紛を抑えきれず、結局は軍による強権・独裁政治が続くことになる。しかし、西洋の自由文化に触れた若者やイスラム教の原点に戻って乱れた社会を立て直そうとするイスラム復興主義者の強権政権への抵抗運動が頻発。その事例として、近年の紛争（一連のアラブの春、タリバンやアルカイダの出現、その流れを汲むと言われる「イスラム国」、更にはホメイニのイラン革命、イラクフセイン政権の崩壊やパレスチナ紛争など）をそれらの背景と共に紹介。

纏めると、イスラム教の教義の曲解や悪用による過激派の横暴や宗派間の対立などアラブ民族内部の問題も有るが、結局「中東を混乱させている真の張本人は西洋列強の植民地・帝国主義更には資源欲しさの恣意的な介入ではなかろうか」と締め括った。